

伝説 の医系技官

北里 柴三郎



北里柴三郎肖像写真（ドイツ留学中の北里「破傷風の血清療法確立を記念して」）

2020年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、感染症対策が大きくクローズアップされた年でした。感染症対策の歴史では、多くの日本人が貢献をしています。中でも必ず名前が挙がるのが北里柴三郎博士です。

北里は、1853年に現在の熊本県で生まれ、1871年に熊本医学校（現在の熊本大学医学部）に入学。オランダ人医師マンスフェルトに学び、医学への道を志しました。1874年に東京医学校（現在の東京大学医学部）に入学しました。在学中に記した演説原稿「医道論」では、医の基本は予防にあるという信念と、研究の成果は広く国民のために役立たされるべきであるという思いが述べられています。

北里は、卒業後は臨床医にはならず、現在の厚生労働省の前身である内務省衛生局に入局しました。当初は照査課に配属となり、外国文献の翻訳や、医術開業試験の実務に携わっていました。2年目には日本ではじめて細菌学の研究設備を整えた東京試験所の兼務となり、当時、流行していたコレラや赤痢など国内の感染症について調査研究を行いました。

当時の衛生局長は、我が国にはじめて「衛生」の語を広めたことで知られる長与専斎でした。北里は長与の推薦で1886年からの6年間、ドイツに留学し、病原微生物学の第一人者、コッホ博士の下で研究に励み、破傷風菌の純粋培養、その毒素に対する免疫抗体、血清療法の確立等の業績を上げ、世界的な名声を博しました。

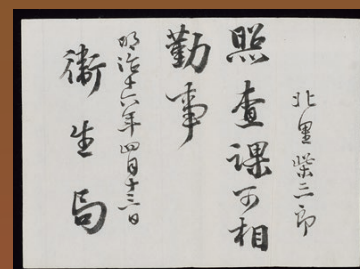
1892年にドイツから帰国すると、福沢諭吉らの支援の

もと、伝染病研究所を創立します。その後も、日本最初の結核専門病院を開設、香港でまん延したペストの調査とペスト菌の発見など、数多くの業績を上げました。

1914年に伝染病研究所が内務省から文部省へ移管された後は、新たに「北里研究所」を設立しました。また、1917年には慶應義塾大学に医学科（現在の医学部）を創設し、初代の学科長に就任しました。

北里は後進の育成にも熱心に取り組みました。教え子には、赤痢菌の発見者である志賀潔、黄熱病や梅毒の研究で知られる野口英世などがいます。研究者として大きな業績を上げるとともに、多方面の人々を有機的につなぎ、組織の設立や人材育成を通じて、後の微生物学や公衆衛生に大きな影響を与えた北里は、今でも多くの人から尊敬を集めています。

（資料協力 学校法人北里研究所 北里柴三郎記念室）



内務省衛生局照査課 辞令 1883年4月13日付